



## P グリーン

- 超速効性液状肥料調整剤
- 肥料調整と体質強化に
- ミネラル配合で他社製品とは一線を画す効きめと速効性

## 生長力の強い苗つくりと肥料管理の最適化で夏を乗り切る

### 定植時の鉢中段の多量施肥、これだけは止めたい

肥料は多く与えれば長期間効く。しかし溶け出す量が多くなり、土中の肥料濃度は高くなります。

肥料は多く与えるほどよく育つものではなく、適量を越えれば、だんだんと生育は悪くなる。根はやがて耐えられなくなり「根いたみ・根ぐされ」を起こす。

こうして生育不良に陥ることになります。

さらにこの原因がわからない為、肥料の量を増やしてしまうことが多く、重症化させることになります。

定植時に鉢の中段に2合くらいの乾燥肥料を施肥する話はよく聞きますが、昔の自家製乾燥肥料の肥料成分は現在市販されている肥料に比べ、はるかに低いものが大半でした。夏の気温も現在より低い為、大きな失敗には成りにくい状況ではあったと考えられます。

しかし、近年の夏の暑さを考えた場合に、この方法で定植をすることは大きなリスクを抱える事になり、おすすめはできません。(定植時に止めてほしいことNo. 1です) これは特殊な例かもしれませんが、化成肥料の併用という場合もあります。

“昔の菊つくりの本”に少量を入れると書かれていたの

を見たことはあります。

しかし緩やかに溶けて長く効くタイプのもので、生育中の肥料切れを気遣う補助的なものでした。

大失敗となるのは化成肥料も少量を入れるのではなく、乾燥肥料と同様に大サジ2~3杯は入れているようです。化成肥料はたとえ緩効性といっても元々、成分は有機肥料の数倍含まれています。

乾燥肥料や化成肥料をこのような使い方をしたのでは、枯死にいたることが多々あります。(1/3枯れた、半分枯れたなどの話がありました) 勿論、化学肥料のみであっても、この様なことが起きてしまう事があっても不思議ではありません。

鉢の中段に、肥料は入れない、表土に適量置き、土をかぶせる。これが基本です。

どうしても入れないと安心できない方には「りんのうちから」がおすすめ。チッ素分の消化を早め、肥料残りが起きにくく、調子がよいと言う方も多々あり好評です。

(大サジ1杯 15~20グラムくらい)

### チッ素過剰の生育では優秀花は咲かない 早めの対処がなにより大切

「葉が黒くなる」「葉が巻く」「葉のフチが波打つ」「葉がタレ下がる」。

などはチッ素過剰の典型的な生育の姿です。

この症状は「肥料の与え過ぎ」「チッ素に片寄った肥料の与え方」や「根いたみ、根の活力低下」により、リン酸やカリの吸収が低下した時などに起こります。

この症状は、消化しきれなかったチッ素分が茎葉に残った時に発生し、生育に勢いがなくなってきました。

このままの状態では開花期に進めば、花の肥大や、花の色が悪くなります。また花ぐされや花卉の乱れが発生し、優秀花にはほど遠い菊つくりとなってしまいます。

この状態で秋に肥料調整をしようとしても、代謝機能が低下している為、正常な生育状態に改善することは簡単ではありません。

この様な状態にしない為には“今が大切”できる限り早急にチッ素過剰の状態を改善し、正常な生育状態に戻す事です。(使用する肥料は、P.Kマグ または Pグリーン です)

昔は“生育はチッ素だ”“肥料は与えるほどよく育つ”こんな考え方もあったようですが、夏の気温が上昇し

た現在では、この様な考え方は全く通用しません。

菊の生育ステージに合わせた、肥料成分の使い分け(肥料の使い方) 使用量など、より正確な肥料管理が求められます。

(「こうすればよい花が咲く 肥料の使い方」をご参照下さい)

#### 【対処方法】

##### ・必要量の2~3倍与えてしまった場合

早く気付けば取り除く。全体に肥料が溶け出してしまった場合はエストール(ランドライフ)で肥料の除去をする。(3~4日間隔で3~4回は必要)

##### ・その他のチッ素過剰の状態

急を要する場合は、Pグリーンの葉面散布又は灌水、長く効かせたい場合は、P.Kマグの散布をします。

注) 化学肥料を使用してチッ素過剰の状態に陥った場合は葉っぱが硬くなってしまふ場合が多く、正常な葉っぱには戻らない場合が多い。化学肥料は使用しない事が基本です。

※ かわらばん H30年7月号 第110号を参考にして下さい。

## 暑さ対策は生長力の強い優秀苗づくりから……秋の花後の管理～サシ穂採取までが重要

暑さ対策は日除け、風通しなど栽培環境の最適化や適正な肥料の与え方、水掛けなどは重要ですがサシ芽、苗づくりも極めて重要です。

根量の豊かなサシ芽苗は活着が早く、旺盛な生育をします。ところが根量が少なく、貧弱な苗は活着に時間がかかり、焦って肥料の量を増やすと肥料が多過ぎ、逆に根の伸長が悪く、生育不良の原因を作ってしまう。

その結果、根張りが不十分で生長力の弱い状態で暑さを迎えることになります。

この状態では暑さの影響を大きく受けることになり貧弱な木づくりとなってしまいます。

昔から苗半作などと言われていますが、サシ芽から苗づくりは極めて重要になると考えます。

しかし、旧来のサシ芽の方法はサシ穂の切口近くに10本、そこそこの根が出れば“良し”としてきたように思います。

現在、これを直接5号鉢に鉢上げし、育てる方が非常に多くなったと思います。

この方法では“根づくり”に時間がかかり、暑さの影響を受けやすく、十分な根張りの苗づくりがむずかしくなってきました。

この状態でのサシ芽の発根状態では旧来からの苗づくりの方法で7～8センチのポットに鉢上げし、十分な根づくりをした上で5号～6号鉢に鉢上げし定植(9号鉢)する方法が確実な方法であると考えます。

旧来のクン炭・鹿沼土・バーミキュライトなどのサシ芽用土に“箱サシ”やビニールポットを使用してのサシ芽では最上の苗づくりはなかなかできません。(苗づくり応援資材=ハイブリットサシ芽用土・キクにキンコン・みらい・P・グリーンなど)

当社ではこれらのサシ芽用土とは一線を画す“微生物の力”を応用した高性能のサシ芽用土を普及してまいりました。

発根が早く、豊かな根量となり充実した根が形成されるのが特徴です。

菊づくりにおいてスタートダッシュの遅れは後々の生育に大きな差ができ、挽回するのは非常に難しくなってしまいます。

なんとか挽回を図ろうと思い“肥料の量を増す”だけでも試みることでありますが培養土の肥料濃度を高め過ぎる結果に陥り“根の活力低下や根いたみ”の発生となることもあり、最悪の結果をまねくことになりかねません。

サシ芽からポット上げまでのサシ芽の工程は菊づくりにおいて極めて重要であると言えます。(勝負は苗づくり)さらにサシ芽の発根状態の“良し悪し”は“サシ芽”のみで決まるものではなく、サシ穂の“良し悪し”によるところが大きく、親株の管理からサシ穂を採取するまでの工程も極めて大切であると言えます。細く弱々しいサシ穂と充実したガッチリしたサシ穂を比べるとその結果は一目瞭然です。(※参考資料「ミニ情報 花後の管理」で説明しています。ご参照下さい)

## サシ芽苗の根量(根張)不足は後々の生育に及ぼす影響は大きい

本当に知りたいのは“菊”ですが、同様のことが畑でも発生したので参考にしてください。

### きゅうりの例(当社の畑)



5月31日植付け  
6月23日撮影

根張不良の苗

ホームセンターで購入した9～10センチのポット苗ですが、1本のみ根張不良の苗がありました。他の苗は根鉢ができていましたが、この苗は底の3割程度根が張ってなかった為、全ての苗を5号鉢で育苗し、畑に植えました。

その際、購入時の根張不良の苗は、他のすべての鉢が根鉢ができていたにもかかわらず、3割くらい底部の土が落ちてしまう状態でした。

ある程度生育が悪いことは考えていましたが、写真のような大差になることは考えていませんでした。

苗の出来映えが後々の生育に及ぼす影響は大です。

## 暑さ対策に最適な資材の例

P.グリーンと天然ミネラルは  
ただいま特別価格にて販売しております。  
詳しくは同封のチラシをご覧ください。





## 菊の例

### 根張の良い苗とやや根張が不足する苗での生育比較

6月4日撮影



上段のサシ芽苗は下段の苗に比べ、根量の多いことが認められる。  
その差が後の生育に及ぼす影響を確認しました。

6月24日撮影



サシ芽苗の根量の差がそのまま生育の差となって現れています。(鉢上げ 6月4日)

### 「ダンゴ挿し」それとも「発根剤」のみ使用

#### どちらがよく発根する?! …… よくある質問

サシ芽はすりつぶした鹿沼土やトノコなどに発根剤を混ぜ、サシ穂にダンゴ状に付着させ挿す方法と発根剤のみをサシ穂に塗布し、挿す方法などがあります。“どちらの方法がよいか”よくある質問です。当社では発根剤プラス“ダンゴ挿し”の方法をおすすめしてきました。今回は比較する機会にめぐまれましたので、その結果をご紹介します。この試験は大菊の苗づくりであり「一輪の花にこだ

わる」この考え方が基本です。そこには苗販売業者様が重要視するであろう、能率や効率などは含まれていません。発根剤は一般的に使われている「ルートン」を使用し、ダンゴ挿しのドロは「トノコ」を使用しています。一方、発根剤のみは同様に「ルートン」を使用しています。

### 「ダンゴ挿し+発根剤」と「発根剤」のみの根量を比較

…8号鉢に1本植えにし、生育の比較をする予定



・写真上段はダンゴ挿し+発根剤  
・下段は発根剤のみ

結果は見たとおりダンゴ挿しの方が発根状態が優れています。この根量の差が後々の生育に大きくかかわってきます。(上段の写真をご覧ください)

#### サシ芽の手順は下記のように行いました。

- ① サシ穂採取、調整後「透水源」2000倍で水上げ。
- ② ダンゴづけ サシ穂に厚さ1～1.5ミリくらいになるようにドロをつける。(ドロは1～1.5ミリの厚さに付着するように濃さを調整)
- ③ その上に乾いたトノコをまぶす。
- ④ ある程度乾いたら(固まるのを待って)7.5センチポットに挿す。
- ⑤ 挿し終わったらタップリと水を掛け、発根を促す。(天然ミネラル1000倍にうすめて使用)

※ 発根剤のみ付着させたサシ穂もダンゴづけ以外は同様の手順です。

※ 当社のハイブリットサシ芽用土を使用していますが、自家製の鹿沼土、クン炭、バーミキュライト等を使用したサシ芽用土でも同じような結果が予想されます。特別に細かなピートモスを使用した場合には結果は少し変わるかもしれません。

2018年5、6月にかわらばんと同送した“スプレー菊のつくり方”をご参照ください。  
HPにも同じ物を掲載しています。「ウチダケミカル スプレー菊のつくり方」で検索してください。

菊花大会に出品する為には、出品規定があり、高さや仕立ての方法が決まっています。全菊連の出品規定では鉢の下端から最上位の花頂の高さが75センチ以上110センチ以下とし、芽数は3本となっています（全国的にこの規定に準じていると思います）又、天・地・人の考え方はなく、どこから見ても同じように見えること、高さは3株とも同じ高さに育てます。

高さをそろえるのは簡単ではありません。まず3株そろった苗でスタートしよう。

1鉢育てる為には最低5～6本の苗を育てる。できる限り伸ばして高さのそろった3株を選び、定植する。10～15センチくらい伸びたところで背丈をおさえる為、ピーナインを散布する。（500倍くらいが目安）サシ芽の時期は7月10～15日くらいが目安です。8月10日頃が定植の目安です。

ポット挿し……ポットの外周に寄せて挿す

こだわるならこの方法（7号鉢3株植え向き）

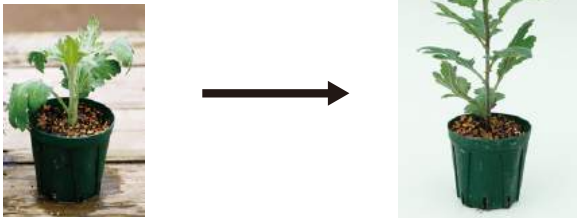


定植……背丈と草勢のそろった苗を植える



ポットの中央に挿す

こだわって育てるならおすすめしません。  
（6号鉢一株植え又は切り花向き）



箱挿し……育苗箱の側壁近くに挿す



サシ芽は側壁のできる限り近くに挿す。  
ポット挿しの外周近くと同じ意味

肥料関係…大会に出品するなら

定植には「りんのちから」を使用しますが、大会出品では木づくりも重要です。  
追肥は「菊養源 6-6-5」や「アミノパワー」の使用も考えられます。  
液肥は「みらい」「アミノ液肥 555」「アミノPK」の使用もあります。  
花色も重要となる為「こくな～」で花色をより鮮明に仕上げることも大切です。  
肥料が残ると花卉の奇形が出ることがあり、肥料調整「P.Kマグ」または「Pグリーン」の使用がおすすめです。